

序文	古代都市研究の最前線
----	------------

巻頭言

渡部 森哉*¹ 村上 達也*²

論集第14号をお届けする。

新型コロナウイルスが蔓延し始めた2020年から様々な行事が中止となった。2月24日に開催したシンポジウム「国家なき都市と都市なき国家～古代文明を「再構築」する～」は結果的にコロナ前の最後の対面開催の企画となった。

このシンポジウムはサバティカルで日本滞在中の村上と渡部が立案して実現した。古代都市をテーマとすることとなった。その際、ゴードン・チャイルドのモデル（Childe 1950）を批判的に検討し都市と国家を分けて分析すること、都市における差異化を生み出すメカニズムと多様な人びとをつなぎ合わせる統合のメカニズムを考察すること、を全体的な方針として設定した。

それぞれの地域の専門家が最新の研究成果を踏まえた上で、研究発表を行ったのであるが、やはり時間の制約上、当日は十分に議論することはできなかった。本論集はシンポジウムの成果であるが、各論文はボリュームのある充実したものとなった。

執筆依頼の際、執筆者に次のような方針を伝えた。それぞれの地域の議論にはその地域独自の概念や伝統、調査方法があるものの、全体的な方針に合わせて執筆して下さった執筆者にお礼を申し上げたい。

1. チャイルドの議論を先行研究として検討する（好意的にせよ批判的にせよ）。
2. 都市を論じる際、東アジアの政治的な「都城」と西アジアの経済的な「都市」を分ける類型化（藤本2007『都市と都城』）を念頭に置きつつ、今回は比較の枠組みとして、政治的な側面と儀礼的（宗教的）側面を分析概念（ヒューリスティック・ディヴァイ

ス）として分ける（必要ならば別の相も加える。質的な記述）。その上で、各地域各時代で、政治的側面と宗教的側面が概ね重なり分離することが難しいのか、あるいはある程度分けて記述することが出来るのか、前者と後者の範囲（規模）が異なるのか、異なる場合どちらが広いのか、を議論する（量的な記述）。例：アンデス形成期の神殿社会では、1つの神殿の中に複数の集団を組み込んでいるが、インカ帝国の支配下には各ワカ（聖なる存在）を奉じる集団が複数ある。

3. 建造物の性格の分類（例：宗教的建造物、政治的建造物。質的な記述）と、公共性（規模、アクセスなど。量的な記述）の度合いとの関係、その通時の変化を論じる。例：アンデスでは神殿建築は前3000年頃からあるが、宮殿、あるいは権力者の墓などは国家成立（後1世紀）後にも明確ではない。
4. 都市遺跡の物質的複雑性（建築や各種の遺物）から人間集団の複雑性がどのように再構成できるのか。文字史料がある場合、人間集団を現す名称（民族名称、職業の名称、身分の名称）とどのように対応させることが出来るのか。
5. 階層性という用語で推定される人間集団の上下関係のみならず、水平方向の人間集団の複雑性に着目する。例：アンデスの国家社会は、上下は2段階に分かれるが、水平方向にはより多く分かれる。しかし職業分化は進まず、多くは半農半職人であった。
6. 都市を構成する人間集団を論じる際、多様性という用語を安易に用いない。多様であるかどうかではなく、多様性の度合いを比較するためにはどのような線引きが適当かを考える。同一地域での通時の変化を説明するためにあえて数値を用いて理解の補助

*¹ 南山大学

*² テュレーン大学

とすることも試みる。

7. 時間軸を導入し、変化を記述する。人口増加のみならず人口減少にも着目する。
8. 大まかな推定人口、推定の方法を加える。他の研究者の論文の引用でも可。
9. 国家という政治組織と都市（的遺跡）の関係を明示的に論じる。特に関係の通時的な変化について。
10. 都市的遺跡間の関係について。都市的遺跡が単独であるのか、あるいは複数の1つなのか。例：アンデス形成期の神殿間にネットワークはあるが、神殿間に階層性は想定されない。またある集団が同時に複数の神殿に属するとは想定されない。一方、インカ期の行政センターはネットワークの一部。

提出された原稿を編集者（渡部・村上）が読みコメントをして、修正をお願いした。論文は、シンポジウムでの登壇順と同じである。チャイルドのモデルを議論のたたき台としていたので、チャイルドのモデルに近いメソポタミア地域（小泉論文）から始まり、同じアジアの中国（西江論文）、日本（寺前論文）、アメリカ大陸ではメソアメリカ（村上論文）、アンデス（渡部論文）と、次第に遠くなる配置とした。遠くなるということは、地域的に遠いことだけでなく、チャイルドのモデルが当てはまらなくなるという意味でもある。

小泉論文はメソポタミアを対象とした都市論の最前線を示している。都市計画、行政機構、祭祀施設の3つの指標に着目して都市の特徴を整理する手法は通文化的な比較にも応用できる方法である。ウバイド期からウルク期の変遷を詳細に検討し、よそ者という概念を導入することで、都市の多様性を鮮やかに浮かび上がらせる。他の地域を専門とする研究者にも大いに参考となる論文である。

西江論文は、新石器時代後期の大規模遺跡を紹介し、その後の中原の初期王朝との接続を考察する刺激的な内容である。新石器時代の大遺跡が放棄され、中原の初期王朝が出現するプロセスを鮮やかに描き出している。初期王朝の成立前に大規模遺跡が放棄されるという現象を、どのように考えれば良いのか、我々に問いかけている。

寺前論文は、日本における古墳時代を取り上げ、都市的な集住地域がないことの意味を考察する。都市なき権力システムとして古墳時代の社会を描き出しており、日本の事例は、都市とは何かという問題を考古学的に再考することを要請している。

村上論文は理論的考察の後、自らが調査しているメキシコ中央高原のトラランカレカを事例とした実証的な議論を行っている。同遺跡が位置するマクロ地域をそれよりも古い時期の都市的遺跡からの流れを踏まえて、どのように位置づけられるかを考察する。メキシコ中央高原の事例を明らかにし、マヤ地域の事例と比較検討することで、メソアメリカにおける都市の系譜の議論が整理されるであろう。

渡部論文はアンデスにおける大規模遺跡の特徴を神殿に着目して考察する実験的な試みである。古代アンデス文明は神殿から始まったと指摘されるが、ではその後の国家社会で神殿はどのような位置づけにあったのかを類型化して考察する。

本論集の各論文から、新たな研究の方向性が生まれてくればうれしく思う。

シンポジウム開催から論集の編集までお世話になった関係者にお礼を申し上げる。

参考文献

Childe, V. Gordon

1950 The Urban Revolution, *The Town Planning Review* 21(1): 3-17.